

中国雑誌「女声」文芸欄再論：上海で形成される宮沢賢治テキスト

頼, 怡真
九州大学大学院比較社会文化研究院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1525857>

出版情報：九大日文. 24, pp.49-64, 2014-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

中国雑誌「女声」文芸欄再論

——上海で形成される宮沢賢治テクスト——

LAI
Yichen
頼 怡真

一、はじめに

前稿「中国雑誌「女声」の文芸欄をめぐって——宮沢賢治「注文の多い料理店」を中心に」（『九大日文』二〇号、平成二四年一〇月）では、田村俊子が主催した月刊中国雑誌「女声」（計四巻、各巻一二期、欠号も含め全三八期、昭和一七年五月〜昭和二〇年七月、現在、上海図書館所蔵）における文芸欄、特に第二巻第二期の文芸欄に宮沢賢治「注文の多い料理店」が掲載されたことの意味について論じた。しかし、その際には、訳者である緑妮の正体がかみかず、中国語原文も入手することができておらず、資料収集が不完全であった。その後、近年「日本近代文学の（上海）体験」をテーマにして研究し、『上海 1944-1945 武田泰淳『上海の蜩』注釈』⁽¹⁾の共同編者でもある関西学院大学の大橋毅彦教授によつて、「緑妮」が画家、陳抱一（明治二六年〜昭和二〇年）の娘、陳緑妮（大正一三年〜平成七年）であることが判明し、彼女が「女の国籍」（小説新潮）昭和二六年一〇月号）のヒロイン「陸淑華」こと「大和淑子」などの武田泰淳の複数の作品に登場した中日「混血児」女性のモデルにもなっていることがわかった⁽²⁾。

前稿では、日本人作家の作品を翻訳した訳者についての資料が少なく、「女声」が生成された空間及び、その周辺の編集者の構成を正確に把握することができなかった。「女声」の文芸欄に掲載されていた日本人作家と編集長である俊子の接点を見い出そうとしたが、豊島与志雄以外との接点が不明瞭であった。豊島は南京で行われた第三回大東亜文学者大会に出席していたが、俊子もまたその会場に向いており、この二人に接点があることが判明した。それ以外の作家については、前稿では、たとえば武者小路実篤の作品が五四運動を中心とする新文化運動を契機にして広く中国で紹介され、当時の中国の知識人の間に浸透していたことしかはつきりしなかった。また、戦争中に「兵隊三部作」で一躍、時代の寵児になつた火野葦平の作品も、日本での出版と比べて大きな時差もなく、中国で出版されていたことがわかった。宮沢賢治の場合は、作品が中国語訳され「女声」に掲載されたが、それが賢治の意志とは関係がなかったことは言うまでもあるまい。賢治の死後に賢治テクストが普及するに当たつてもっとも活躍したのは草野心平であった。その心平こそが、俊子の「女声」を上海という大舞台に誕生させたキーパーソンであった。豊島与志雄、武者小路実篤、火野葦平、宮沢賢治、草野心平、そして田村俊子。以上、「女声」にかかわつた人物の名を並べてみると、賢治を除き、これらすべての人物をつなげるものがあることがわかる。それは、戦争協力を目的として三度にわたつて開催された大東亜文学者大会の存在である。つまり、賢治を除き、これらの作家たちはみな大東亜

戦争にかかわった人物であり、俊子だけでなく、彼女の雑誌を陰で支えていた共産党の地下工作員、関露もまたこの大会に出席していた。前述した緑妮のほかに、もう一人の訳者「荻崖」が陶亢徳である可能性が濃厚であることもわかった。^④ 陶亢徳は「女声」を発刊した太平書局の責任者の一人であり、また、戦後、第二回の大東亜文学者大会に参加したことで昭和二十一年に漢奸として刑を受けていた。「女声」に掲載された日本人作家の作品は恣意的に選ばれていたように見えるが、「女声」に携わっていた人々の中でも、とりわけ訳者の正体が突きとめられたことで新しい解釈ができるのではないだろうか。

本稿においては、二人の訳者の周辺をめぐる時代背景および大東亜文学者大会の問題について検証することによって、宮沢賢治「注文の多い料理店」だけでなく、「女声」に掲載されていた日本人作家の作品の選定問題について、その特色をより深く浮彫にしたい。

二、田村俊子主宰「女声」と大東亜文学者大会のつながりについて

前稿（『九大日文』二〇号、三六―三七頁）では、「女声」文芸欄に作品^⑤が掲載されていた豊島与志雄が南京で開催された第三回の大東亜文学者大会に参加していたと述べたが、実は一つも漏らさずに三回の大会全てに出席していたことがわかった。尾崎秀樹の『近代文学の傷跡』に、第一回大会において「豊島与志

雄は英米的語感から東洋的語感への転換を文学的実践において力説し」^⑤とあるように、豊島は昭和十七年一月四日、五日に大東亜会館で開かれた本会議に出席し、二日目の午後、「文学を通じて大東亜戦完遂についての方策」という議題の討論に参加していたのだった。また、豊島と親交のあった中島健蔵は、草野心平と前衛芸術運動「火の会」を結成した同人であり、中島と心平との繋がりの延長線上には、心平と豊島の接点があったのかもしれない。

このように、昭和一五年―一九年の間に四回に渡って中国を訪問した豊島与志雄が、三回目の訪問で南京で行われた第三回大東亜文学者大会を訪れ、そこに田村俊子も出向いていたということになる。その後の文人たちの交流については、阿部知二の「花影 田舎への手紙」（『文学界』昭和二十四年六月号）に記されている。阿部知二だけではなく、「女声」の創刊を手助けしていた草野心平との接点もあつた中島健蔵も、豊島の友人の一人であつた。昭和一九年の五月から翌昭和二〇年の四月までほぼ毎月のように、俊子主催の「女声」に豊島の童話が掲載されていたのは、偶然ではないと考えられる。そして重要なのは、大東亜文学者大会に三回に及んで出席していた豊島の作品が「女声」の文芸欄の中で最も掲載数が多いことである。豊島が童話を書くことに長けており、大東亜戦争に協力することを避けたかつた閑露にとつて、一見、童話という政治色の薄そうに見えるジャンルが都合のよい材料だったことが、豊島の童話が掲載された背景にはあるだろう。

続いて、田村俊子「女声」と大東亜文学者大会の繋がりをさらに掘り下げて考えてみよう。瀬戸内寂聴によれば、俊子は「内地から訪れる懐かしい文学者たちに逢うためいそいそと出むいていった」という⁹⁾。「大東亜文学者大会」とは、第二次世界大戦中における戦争協力を目的として、日本文学報国会などが中心となって昭和一七年から昭和一九年まで三回にわたって開催された文学者の交流大会である。三回の大東亜文学者大会の参加者の中でも「女声」と関係のある面々の名前を並べてみよう。

第一回 昭和一七、一八、一九、二〇、東京と大阪

(日本) 菊地寛、河上徹太郎、戸川貞雄、高村光太郎、武者小路実篤、杉森孝次郎、長与善郎、白柳秀湖、横光利一、富安風生、川路柳虹、新居格、林房雄、白井喬二、土屋文明、春山行夫、**豊島与志雄**、藤田徳太郎、高田保、水原秋桜子、尾崎喜八、舟橋聖一、安田与重郎、日比野士郎、山口青邨、細田民樹、中野実、片岡鉄兵、中村武羅夫、久米正雄、甲賀三郎、亀井勝一郎、深田久弥、吉川英治、岸田国士、高橋健二、浅野晃、中野好夫、三好達治、小林秀雄、吉植庄亮、木村毅、加藤武雄、村岡花子、吉屋信子、富沢有為男、山中峰太郎、中河与一、斎藤瀏、下村宏

(台湾) 西川満、浜田隼雄、張文環、竜瑛宗
(朝鮮) 香山光郎、吉村香道、兪鎮午、寺田瑛、辛島驍
(満州) 古丁、爵青、バイコフ、山田清三郎、小松、呉錫
(中国) **錢稻孫**、沈啓元、尤炳圻、張我軍、周化人、許錫慶、丁西林、**潘序祖**(**潘子且**か、**頼注**)、**柳雨生**、周毓英、**龔持平**、**草野心平**
(蒙古) 小池秋羊、和正華、恭佈札布

第二回 昭和一八、八、二五、二七日、帝国劇場と大東亜会館

(日本) **阿部知二**、石川達三、池田亀鑑、一戸務、岩倉政治、上田広、円地文子、小田巖夫、尾崎一雄、尾崎喜八、魚返善雄、大仏次郎、大木惇夫、大橋松平、加藤武雄、片岡鉄兵、金子洋文、上泉秀信、亀井勝一郎、川上三太郎、川田瑞穂、川路柳虹、河盛好藏、木村毅、久保田万太郎、窪川稲子、小林秀雄、佐藤春夫、斎藤瀏、里見弾、塩田良平、白井喬二、田村木国、高嶋米峰、高田真治、高田保、高橋健二、高見順、林芙美子、富沢有為男、川田順、浅野晃、尾崎士郎、吉川英治、今日出海、伊東月草、久米正雄、菊地寛、甲賀三郎、戸川貞雄、川上徹太郎、竹田復、谷川徹三、土屋久泰、土屋文明、暉峻康隆、富安風生、**豊島与志雄**、中野実、**中島健蔵**、中村武羅夫、長与善郎、丹羽文雄、西尾実、野口米次郎、芳賀檀、春山行夫、浜本浩、橋本成文、蓮田善明、林文雄、日比野

士郎、**火野葦平**、福田清人、藤田徳太郎、舟橋聖一、北条秀司、丸山義二、水原秋桜子、**武者小路実篤**、保田与重郎、山岡荘八、山口青邨、横光利一、吉植庄亮、吉屋信子、吉川幸次郎、淀野隆三、谷崎潤一郎

(台湾) 周金波、斎藤勇、長崎浩、楊雲萍

(朝鮮) 兪鎮午、崔載瑞、津田剛、金村竜斎、柳致真、(張赫宙)

(蒙古) 包崇新、(青木啓) 王承琰、石塚喜久三、赤塚欣二

(満州) 山田清三郎、呉郎、田兵、古无、大内隆雄

(中国) **柳雨生**、謝希平、魯風、陳撲、沈啓无、**閔露**、張我軍、周越然、陳廖士、章克標、徐白林、柳竜光、陳綿、丘韻鐸、(蔣義方)、竹中郁、**陶亢徳**、**草野心平**、(蘇正心)

第三回 昭和一九年十一月二日〜一四、南京

(日本) 高田真治、土屋久泰、**豊島与志雄**、戸川秀司、長与善郎、**阿部知二**、奥野信太郎、高見順、百田宗治、土屋文明、芳賀檀、香山光郎、**火野葦平**

(満州代表) 山田清三郎、古丁、爵青、田魯、疑遲、竹内政一、小松、他一名。(太字は「女声」関係者を示す)

前稿で述べたように、俊子が出席していた第三回大会におい

て俊子と豊島与志雄の接点を見い出すことができた。右の出席者リストの中では、「女声」の関係者の名前を太字にしている。

この中で最も注目すべきなのは、第二回大会に出席し、「女声」の編集に大きく関与していた閔露(明治四〇年〜昭和五七年、本名胡寿桐。河北省延慶県生まれ)の存在であろう。閔露が共産党から地下工作員として「女声」に送り込まれたことはすでに既知の事実であり、「女声」においては中国語の不自由な俊子のかわりにほとんどの編集を行っていた(詳細は前稿を参照)。岸陽子によれば、閔露が出席することは駐中国日本大使と俊子が推薦したことらしいが、共産党も閔露に積極的に参加をすすめる指令を出していたという。岸は、閔露は帰国後、どうしても「女声」に書かざるを得ない第二回大東亜文学者大会の本格的レポートに向けて伏線を仕掛けたのだと述べ、閔露が「女声」に寄せた文章「東京憶語」(一)と(二)は昭和一八年九月の第二巻第五期に掲載され、また(三)は同年一〇月第二巻第六期に掲載された)において、たえず自分自身の体調不良を強調することによって、「徹頭徹尾、神経を病んだ人間の眼を通して戯画化するしかなかった」のだと指摘している。つまり、閔露のレポートでは三日間にわたってひどい頭痛があり神経が疲弊したことはかりが言及され、日本語がわからないから、久米正雄の朗読している姿だけ鑑賞し、それが素晴らしかったことに感歎したり、門司から下関に至る海底トンネルについての感想や帝国劇場内にある緞帳の美しさに目を奪われたことなどが述べられており、肝心の大会報告の内容に対しては一言も言及されなかったのである。

る。こういった彼女の神経衰弱についてのレポートにおける事実の隠蔽は、敵側（日本側、汪精衛政府側）の宣伝に利用されないためのぎりぎりの抵抗を試みるための方法であり、大東亜文学者の共犯者にならないための企てでもあったのである。

確かに、岸が指摘しているとおり、関露が共産党地下工作員の身分であったこともあり、大東亜文学者大会への出席は、関露にとつては望むところではなかったことだろう。しかし、三回にも及ぶ大東亜文学者大会に出席した面々の名前を見ても、とても興味深いことがわかる。大東亜文学者大会に出席した中国側の文学者たちを皮肉って、尾崎は内山完造『花甲録』の中の一節を引用している。それは次の文章である。

大東亜文学者大会があった。中国側から誰れが行くかと思つて居つたところ私の知つていふような文学者の名は一人も出なかつた。曰く周越全⁽¹¹⁾とか、播予且⁽¹²⁾、陶元徳⁽¹³⁾とか柳雨生⁽¹⁴⁾とか、婦人で関露とか云うような人で、その団長が周作人とか云うて全く驚いた顔触れであつたが、また当然でもあつた。そして柳雨生が日本で非常に歓迎されたとも聞いて居つた。しかしそんなことは私には関係のないことであつた。一度興亜院の文化部からであつたと思う、この大会に出席する文学者を紹介して呉れと云うことであつたが、「折角ですが中国の文学者では名のある人で出席する人は一人もあるまいと思ひます」とお答えしたことがあつたと思ふが果たしてさうであつた。⁽¹⁰⁾

右は内山が昭和一七年の日記で書いた、第一回の大会に対する追懐の文章であるが、第二回の出席者の名前も混入したものになつてゐる。当時、日本側から中国側の出席者として希望されていた作家として、郭沫若、老舍、林語堂といつた大物の名前が挙げられていたが、実現できなかったという。蔣義方が指摘してゐるように、「政府の役人あり、語学の教師あり、雑誌や書籍の編集者あり、新聞記者ありで、厳密にいえばはたして文学者と呼べるかどうか疑問」⁽¹⁵⁾である。潘予且（明治三五年〜平成二年）は多作の小説家で、『予且短篇小説集』は第一回大東亜文学賞を受賞し、のちに昭和一八年七月に太平書局から出版されている。蔣が指摘してゐるように、柳雨生（本名柳存仁、漢文学者。大正六年〜平成二年）⁽¹⁶⁾は汪精衛政府宣伝部の一員で、陶元徳（明治四一年〜昭和五八年）⁽¹⁷⁾は中華日報編集長であり、関露は言うまでもなく「女声」の中心人物である。そしてこの面々はまた、「女声」の投稿者たちの顔触れと重なつてゐるのである。

塗曉華によれば、「女声」の言語空間を極めて複雑に形成している原因としては、雑誌に投稿している作者の面々を挙げることができるといふ⁽¹⁸⁾

共産党の地下工作員である関露をはじめ、丁景唐が率いた上海地下工作員や進歩青年などがおり、彼らは「女声」の主な投稿者層を占めていたという。また文壇では比較的活

躍をしていた新進作家の董樂山、堯洛川、馬博良、沈寂がおり、創作で衰えることの知らない予且や「落水文人」(落ちぶれた作家、頼注)と呼ばれた周作人のほか、萩崖(塗は陶亢徳ではないかと述べている、頼注)、柳雨生といった特約作家などからの寄稿もあつたという。そのほか、村尾絢子や小宮義孝といった日本からの投稿者もいた。(本稿における塗の中国語の論文の引用は全て拙訳である)

塗が挙げている投稿者の名前は、川鍋東策「田村俊子を繞る詩人たち」(「歷程」昭和四三年六月)において挙げられた面々の名前と重なっている。川鍋によれば、俊子の周りには詩人的な人々が集まっていたという。例えば、報道写真家の名取洋之助、陶晶孫、戦後消息不明のエッセイスト柳雨生、画家の村尾絢子、ロシアンバレエの小牧正英、作家の武田泰淳、堀田善衛、石上玄一郎、内山書店の内山完造、寄生虫病医学者の泰斗、小宮義孝などである⁴⁵⁾。また、塗の挙げている「女声」の投稿者についての指摘の中で注目すべきなのは、訳者の萩崖についての指摘である。塗は、萩崖の正体が陶亢徳なのではないかと推測しているが、その推論の経緯については説明をしていない。恐らく塗は、「女声」を発刊している太平書局の責任者が柳雨生と陶亢徳の二氏だった経緯をたどつてその結論に至つたのではないかと考えられる。ここで名取洋之助が経営していた太平出版印刷公司(太平出版印刷株式会社)について述べることにする。

太平出版印刷公司是太平洋戦争が勃発すると同時に、上海の

共同租界香港路にあつたイギリスの印刷会社ミリントン・プレス⁴⁶⁾の経営権を名取が政治の力を借りて落手した会社であつた。名取はのちに、南京に赴いた草野心平に協力を仰ぎ、太平出版印刷公司の顧問として迎えたのであつた。出版社は、昭和十七年頃に名取が草野や柳雨生らと設立した中国書籍専門の出版社である⁴⁷⁾。

責任者の一人であつた陶亢徳は第二回大会に上海代表の一人として出席し、中華日報編集長も務めていた。大会終了後、日本に大使館顧問として滞在し、早稲田大学高等学院講師、安藤彦太郎の個人指導をうけ、昭和一九年三月に帰国したという経緯がある⁴⁸⁾。塗の推論が的中しているとすれば、陶亢徳は帰国後まもなくして「女声」の日本語作品の翻訳を手掛け、同年七〜一二月のあいだに、「女声」の文芸欄に武者小路実篤の「愛と死」(「女声」第三巻第三〜八期、昭和一九年七〜二月。初出「日本評論」昭和四四年七月)を掲載させたことになるだろう。また、陶は武者小路の作品だけでなく、同じ「女声」に掲載された火野葦平「怪談宋公館」(「女声」第二巻第一〇〜二二期、昭一九年二〜四月。初出「南支日報」昭和四四年一〇月二五〜二九日)の翻訳も行つていた。第二回大東亜文学者大会中、共同発表機関紙の刊行が行われ、共同翻訳機関が設置されており、そのメンバーには陶亢徳の名前も挙げられていた⁴⁹⁾。

そして、上海代表として第一、第二回大会に出席した柳雨生、第二回大会に出席した陶亢徳について詳しく述べれば、彼らは名取洋之助が経営していた太平洋印刷公司から独立した太平書

局の責任者でもあった。太平書局とは言うまでもなく、「女声」を発行していた出版社のことである。戦後、柳氏と陶氏の二氏は昭和二年に漢奸として反逆罪を犯した罪で禁固三年の刑を受けたという⁹⁾。

また、短篇集『蟹』で第二回大東亜文学賞の次賞（正賞なし）を受賞した梅娘は「女声」を批判していた人物でもあった²⁰⁾。日本領事館からの資金援助を受けていた「女声」の奥付には、第一巻第三期（昭一七年七月）からは「工部局警務處登記証」が載せられていた。

女 聲	
(工部局警務處登記証) C字第二卷第一期第八號 國民二十年十二月十五日	
發行編輯	左 後 芝
發行所	上海博物院路一四二號 電話：二九九一四號
印刷者	太平出版印刷公司 上海四馬路四八九號 電話：二六〇一七〇號
出版月十五日	
每季一元	
半年二元	
全年四元	
外埠郵費在內	
算計單備論以目價上取	

(図一)

図一は宮沢賢治の作品が掲載されていた「女声」第二巻第八期の奥付である。そして、第三巻第二期（昭一九・六）からは「国民政府宣伝部登記証」が付されている²¹⁾。こういった背景に「女声」が「漢奸（売国奴）雑誌」と評価された理由があるとし、梅娘は「女声」の後援資金の基礎となるこれらの背景こそ「女

声」の母体から孕んでいた欠陥でもあり、こういった「不三不四」（得体の知れない、頼注）出自こそ、中国人たちから敬遠された理由にもなった」と激しく批判している（梅娘「兩個女人和一份婦女雜誌」（外国文藝、平成二年第三期））。

そして、第一回大会に出席し、第三回では議長を務めた錢稻孫は、昭和一六年に賢治の「雨ニモマケズ」を「北国農謡」という題で中国語訳した人物である。また前述したように、「女声」に「怪談宋公館」が掲載された火野葦平は第二回、第三回ともに出席しており、二回とも日本代表として大会宣言の朗読を行っている。また、「女声」に「愛と死」が掲載されていた武者小路実篤も第一回、第二回の両方に出席していた。以上のように、大東亜文学者大会の出席者と、「女声」関係者の面々が重なっているのはただの偶然であろうか。関露、柳雨生、陶亢徳、草野心平らは全員、「女声」の出版社である太平書局と関わりがあり、また、「女声」の文芸欄に掲載されている日本人作家四人（豊島与志雄、武者小路実篤、火野葦平、宮沢賢治）の中でも、宮沢賢治を除く三人が大東亜文学者大会に出席している。この中でも、ただ一人、大東亜文学者大会と関連のなさそうな宮沢賢治も、草野心平や錢稻孫らをおして間接的な繋がりを持つことになった。このように、田村俊子の「女声」と大東亜文学者大会の直接的な接点について明示した資料は存在しないが、大東亜文学者大会に出席した面々を見ると、奇妙にも「女声」の関係者と重なっていることがわかるのである。

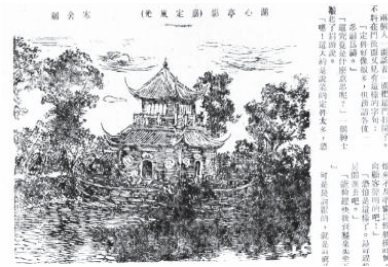
三、混血児の大和撫子——陳緑妮の周辺

前述したように、「女声」の訳者の一人である「緑妮」とは「陳緑妮」のことであり、泰淳「女の国籍」では、ヒロインの「陸淑華」に化して登場しているほか、同じ泰淳の作品である『上海の蜚』における「林小姐」のモデルにもなっている⁽³⁾。彼女は裕福な家庭に生まれ、父親の抱一は先代から継いだ「陳家花園」（柘榴屋敷）と呼ばれる広大な邸宅をさらに拡大させ、緑妮が物心がついた頃には、陳家花園を芸術サロンとして多くの美術関係者や文化人たちが通い詰めていた。しかし、その邸宅も上海事変の際に日本軍の攻撃によって焼かれ、陳家は急に落ちぶれることになる。生計を得るために緑妮は「軍需物資を買い漁る日本側の機関に、秘書として就職」（「女の国籍」）（『武田泰淳全集第一巻 増補版』筑摩書房、昭和五三年一月増補）三〇三頁）していたが、そこは『上海の蜚』においては「東方文化協会」として描かれ、正式名称は「中日文化協会」であった⁽⁴⁾。緑妮はこの協会で「小田先生（小田理事長）」こと林広吉（明治三十一年〜昭和四六年）の秘書として働いていた。武田泰淳をはじめ、石上玄一郎や田村俊子ら文学者が中日文化協会が集まっていた。「木乃伊の口紅」を発表して、かつて男性読者を魅了した田村俊子さんも、しばしば事務所に現われる。西洋人のように骨格たくましい彼女は、背すじもしゃんとして、ハイヒールの靴音を高くたてる。そして私たちに湯団をおごってくれる。彼女は海軍が金が出している「女声」の編集長だ。中国の女流作家閔露を

いつもお伴に連れてくる⁽²⁵⁾とあるように、俊子と閔露、そして緑妮の密接なつながりは明らかである。

瀬戸内寂聴は、俊子には中国文化協会の武田泰淳や堀田善衛をはじめ、上海に渡っていた阿部知二、石上玄一郎などとの交流があったが、「これらの人びとは俊子の往年の名声や業績を伝え聞いてはいても、実感として記憶している世代ではなかった」と指摘している⁽²⁶⁾。しかし、泰淳の複数の小説の中でモデルとして登場している「陳緑妮」が「女声」ではしばしば翻訳を行っていることを考えると、瀬戸内が指摘しているように泰淳と俊子の関係が薄いものではないことがわかる。

四、上海の「注文の多い料理店」



(図二)

次に、翻訳された本文と原文の異同を見てみよう。タイトルは「定件繁多的館子」（「定件」は「注文」の意で、「館子」は「レストラン、飯屋」の意である）と訳されており、タイトルの下には「宮澤賢治著／緑妮譯」とある。二頁目の四〇頁の上半部には、図二のような挿絵が付いている。絵の上部には右から左への横書きの説明文

一軒の西洋造りの家がありました。そして玄関には」とあり、そのすぐ後に挿絵がくるので、本文と対応した形になっている。「女声」掲載時には違う台詞の後に挿絵があるのは、ちょうどそこで一頁四段ある本文の段が変わったためではないかと考えられる。図四の「女声」の挿絵が日本語版とほとんど同じ形になっているのは、「女声」編集部に『注文の多い料理店』の現物があつたからではないかと思われる。前述したように、賢治の童話集『注文の多い料理店』はほとんど売れず、初版で千部が刷られたが、重版はなかった。初版時の紙型が保存されており、これを用いて昭和二年一〇月に杜陵書院から『注文の多い料理店』（B六版並製本）が出版された。この本には軍事的表現が含まれているという理由で、GHQによる検閲によって「注文の多い料理店」の一部分と「鳥の北斗七星」の全文が削除されたという⁽³⁸⁾。また、昭和四四年に「名著復刻全集近代文学館」の一冊として完全復刻本が出版されている。賢治の童話集『注文の多い料理店』が最初に出版されたのは大正一三年のことであり、復刻版として世に出されたのは昭和四四年のことであった。この間の期間に、「注文の多い料理店」の本文が入手可能だったルートはきわめて少ない。深澤忠孝によれば、心平は賢治の詩に驚嘆したが、童話も書いていることは知らなかったようである。「友達にでもあげてください、という通知とともに童話集『注文の多い料理店』がみかん箱一つにギッシリとつまられて、賢治から送られたことがあつた。それが初めて詩の他に童話の作品もあることを知った」⁽³⁹⁾という。草野心平は賢治

の『注文の多い料理店』に触発されて童話を書き始め⁽⁴⁰⁾、とくにその中の一作「風船はあがりたくありません」は「児童文学」第二集（昭和七年三月）に収録されているが、同時にこの雑誌には賢治の「グスコープドリの伝記」も掲載されているのだった。「友達にでもあげてください」という言葉のとおり、心平は賢治から送られてきた童話集を「女声」に携わる関係者に配ったのかも知れない。

五、賢治の戦争問題に対する関心——童話集『注文の多い料理店』と日本帝国主義

前稿（九大日文二〇号、四五頁）で論じたように、戦前・戦中の時局的な評価によって一気に名が知れ渡った宮沢賢治の作品のうち、軍事的な表現が含まれているものは戦後になってから検閲の対象となつたのであつた。そして「注文の多い料理店」には、軍事的な表現が含まれているだけではなく、文脈からしても、同時に帝国主義を批判するような表現もあることがわかる。

西成彦は「山猫軒」を、「絶滅収容所まがい」の「アウシュヴィッツ」に例え、「二人の紳士」が、冷戦時代のまっ最中に敵地へ乗り込んだ「動物あさり」の兵士たちにあたると述べ、「鳥も獣も一匹も居やがらん」というのが、「とつくに退去命令が下がっていた」ためであると鋭い指摘をしている⁽⁴¹⁾。そして山猫に食べられてしまいうるという危機を逃れた二人

の紳士の顔が「東京に歸つても、お湯にはいつても、もうものとほりになほりませんでした」⁽³²⁾という箇所については、西は、「帰還兵を使い物にならない廢人」⁽³³⁾にさせてしまう戦争の残酷性がそこに表現されていると述べている。

賢治の自費童話集『注文の多い料理店』の広告ちらしに書かれている文句「イヴァンの王国」という言葉を、西は、「イヴァンの帝国」のことだと解釈している。一九二〇年代の日本が「イヴァン王国の遠い東」にある広大な辺境をめぐって、まさに帝国主義的な闘争に挑みつつあった歴史を踏まえ、「東北岩手県もまた、間接的に、東京（トキオ）を首都としていたたく日本から見た北方（イーハトヴ）から見ても北方」での闘争に深い関わりを持つ場所であった」⁽³⁴⁾と述べている。賢治のもう一つの商品「氷河鼠の毛皮」（岩手毎日新聞）の初出は大正二年四月一日のことであり、それが童話集『注文の多い料理店』と執筆年代が重なっていることから、谷川雁「月夜のでんしんばしら」⁽³⁵⁾では、「月夜のでんしんばしら」が「電柱の古典的軍隊は単に、物語のすべりをコミック・オペラ風になめらかにするためだけの工夫ではなかった。シベリア出兵のパロディでもあった」とし、「二本腕木の徒歩の日本軍と六本腕木の騎馬のヨーロッパ（米英仏）軍が、無理な聯合を組まされていること」⁽³⁶⁾が描かれていると指摘している。谷川のシベリア出兵説を踏まえて木佐敬久は論文「宮沢賢治とシベリア出兵」⁽³⁷⁾において、「氷河鼠の毛皮」の登場人物の「熊」は「ロシアヤソ連」のニツクネームのことであり、「赤ひげの男」が「熊の方

の間諜」だということは、彼がソ連のスパイであることを意味し、シベリアの革命軍パルチザンを代表していると指摘している。そして登場人物の列車内における座席の配置から、日本帝国主義のシンボルである「タイチ」を挟んで、シベリアの革命軍パルチザンを代表する「赤ひげ」とシベリア出兵の正当性に懐疑的である日本側の賢治の分身である船員が座っている構図が見えてくると指摘している。

したがって、「鳥の北斗七星」において軍事的な表現の描写があつたために、GHQの検閲によつて全文削除されたことからわかるように、童話集『注文の多い料理店』に収録されている作品には実に戦争的色彩の濃い作品が多い。谷川は「月夜のでんしんばしら」を「イーハトヴの陸軍」と見なすだけでなく、「鳥の北斗七星」は「イーハトヴの海軍」とみなされると指摘している⁽³⁸⁾。ちなみに、谷川は「銀河鉄道の夜」の銀河鉄道を南満洲鉄道と読み換えているが⁽³⁹⁾、木佐は「氷河鼠の毛皮」に登場する列車の乗客たちが全員、シベリア出兵を行った軍隊の兵士だと述べている。また、木佐は「氷河鼠の毛皮」と「注文の多い料理店」の二つの共通点にも注目している。それは、「注文の多い料理店」において、「狩猟に來た羽振りのよい紳士がみじめな状態で窮地に陥つたときデウス・エクス・マキナによつて救われるテーマが「氷河鼠の毛皮」と共通して」⁽⁴⁰⁾（二五三頁）いることである。そしてもう一つは、「氷河鼠の毛皮」の登場人物である「タイチ」の乗車目的が、「ひとり出掛けて黒狐を九百足と」⁽⁴¹⁾りにいくことにある。この「黒狐」はシベ

リアの革命軍「バルチザン」の隠語になっている。「タイチ」は最後、危うく「二十人ばかりのすさまじい顔つきをした」「人といふよりは白熊といつた方がいゝやうな、いや、白熊といふよりは雪狐と云つた方がいゝやう」⁽⁴²⁾な人々に殺されそうになる。突如、二〇人もの人々が車内に現われるというこのシーンも実は日本軍が過激なバルチザンに不意打ちされた「尼港事件」がモデルにされている。つまり、このように、バルチザンを狩りに行く「タイチ」が逆にバルチザンに殺されそうになるという構図は、「注文の多い料理店」の、動物を狩りに森に入った二人の紳士が危うく山猫に食べられそうになるという構図と類似しているという⁽⁴³⁾。そもそも「注文の多い料理店」と「水河鼠の毛皮」に見られる「狩猟に行く」という行為自体が帝国主義的であると言える。

このように、童話集『注文の多い料理店』の基本的な舞台となっている「イーハトーブ」とは賢治の心象にある理想郷のことであり、「イヴァン王国の遠い東」にあるのだが、収録されている「注文の多い料理店」をはじめ、「月夜のでんしんばしら」⁽⁴⁴⁾、「鳥の北斗七星」などは「戦争もの」の系譜に属しており、西が指摘しているように、「イーハトーブ」は日本の帝国主義的な野心の表れである「イヴァンの帝国」でもある。東北は、首都である東京と対置され、帝国の領土拡大のための装置であると同時に、中国語雑誌「女声」が生まれた「上海」という空間においても帝国主義的なシンボルなのであった。

六、終わりに——戯画化された「女声」

田村俊子が主催していた中国語雑誌「女声」に掲載されていた日本人作家の作品、たとえば、宮沢賢治「注文の多い料理店」、豊島与志雄「銀の笛と金の毛皮」、「うどんと石」、「太一の靴は世界一」、「象のワンヤン」、武者小路実篤「愛と死」、火野葦平「怪談宋公館」といったこれらの作品の選定は一見、恣意的なものに見えるが、当時の中国における時代背景と一緒に台わせて考えてみると、意外な繋がりが見えてくるのがわかる。宮沢賢治を除き、武者小路実篤、豊島与志雄、火野葦平らは全員、大東亜文学者大会の出席者であった。そして第二回大会に出席していた中国側の代表者を挙げてみれば、「女声」の編集を陰で行い、共産党地下工作員でもある関露をはじめ、「女声」の出版を行っている太平書局の責任者である柳雨生、陶亢徳、二氏、小説家の藩予且など、どれも「女声」の関係者であり、執筆陣営の面々でもあった。

「女声」の編集をしていた関露が、日本で開催された第二回大東亜文学者大会後に「女声」に寄せた文章「東京憶語」では、例えば下関に到着するなり、激しい頭痛に悩まされたり、日本人の代表による演説の日本語がわからずに見るだけの「鑑賞」をしたり、会場の緞帳ばかりに注目したりするといったように、大会の内容とはまったく関係のないことが書かれている。このように肝心の大会の内容には無関心を装うという関露のアイロニカルな書き方については、岸陽子が「徹頭徹尾、神経を病ん

だ人間の眼を通して戯画化するしかなかった」⁽⁴⁴⁾と指摘している。大東亜文学者大会をめぐって閑露の文章の書き方が、共産党の工作員として日本側に加担したくないがためのカモフラージュであるとするならば、「女声」に掲載されていた日本人作家の小説の選評に対しても同じように言えるのではないかと考えられる。

武者小路実篤という白樺派を代表する作家の作風は、ちょうど大正八年に中国で起きた「五四運動」の風潮に迎合するもので、当時の中国の知識人（五四啓蒙運動の旗手である周作人や魯迅ら）の間でも最も歓迎された作家となった。五四運動の主なスローガンの一つでもあった「反帝国主義」においては、特に反日精神が強調されていた。反日運動の一環でもあった五四運動の啓蒙活動に都合よく利用されたのは、白樺派が掲げていた、「腐敗した家庭の束縛」「狭隘な愛国心の拘束」からの自己の解放であった。武者小路実篤は、こういった反帝国思想の啓蒙思潮に本意でありながらも、間接的にそれを手助けした一人となったのであった。しかし、実篤の中心的な主題であった人道的な思想を説いている作品ではなく、戯曲「愛と死」が掲載作品として選ばれているのは、何かが考慮されているからだと考えられる。また同じことが言えるのは、同じく大東亜戦争の協力者として、次々と戦地ルポルターージュを発売した火野葦平の掲載作品である。「兵隊三部作」でベストセラー作家となった火野葦平の作品を「女声」に掲載するのは、一見、日本の帝国主義の宣揚にも見えるが、掲載された作品は日本の兵隊を賛美する

ものの中では最も美化色の薄い「怪談宋公館」であった。泰淳「上海の蜚」において火野「怪談宋公館」のラジオドラマの放送を聞いたと主人公が言う場面があり、「それは、大きな屋敷うちで起った、哀れな中国女性の運命のものがたる。いじめぬかれた彼女は、悲しい運命に耐えかねて、ついに自殺する（中略）火野氏はたしかにその胡弓のひびきを聞いたという」⁽⁴⁵⁾とある。しかし、大橋毅彦の指摘によると、ラジオの脚本にも火野の原作にも「哀れな中国女性の運命」が描かれている箇所は見いだしにくく、ラジオ版で胡弓の伴奏が使われていたのは恐怖を募らせるためであり、題名に「怪談」とあるように、哀れさというより、怪異の雰囲気が全編を貫いているという。「上海の蜚」の「私」が「怪談宋公館」のラジオで流れている胡弓の音を聞いて「夜な夜な泣くが如く」と感じたのは、恐らく「私」が上海で出会った女性への関心が前景化されているためではないかと指摘されている。⁽⁴⁶⁾興味深いのは、泰淳「上海の蜚」という作品に火野の作品が登場していることではなく、「上海」を舞台にするテキストにおいて、「怪談もの」のテキストが「哀れな中国女性の運命」を描くテキストに変貌していることである。そこには作者の意図とは関係なしに、「上海」という空間の特殊性をとおしてテキストの異なる解釈が生じているのである。

同様に、宮沢賢治「注文の多い料理店」が作者の死後に、「女声」という中国語雑誌に掲載されていたことをとおして、そのテキストを新たな観点から読むことができる。時局的に都合の

良い宮沢賢治の作品の中では、かえって帝国主義への皮肉が込められている「注文の多い料理店」が選ばれることになった。

それは「イギリスの兵隊のかたち」をしている二人の紳士が自分たちの傲慢によって、危うく見下していた山猫に食べられてしまいそうになるという「帝国への批判」としても読み取れる作品なのであった。賢治作品の普及の初期段階を考えてみると、賢治の聖人化を促すような作品、例えば「雨ニモマケズ」や「ゲスコードリの伝記」、「気のいい火山弾」などが意図的に紹介されていたことがわかるが、帝国主義に批判的な「注文の多い料理店」が掲載されたのは日本帝国主義のプロパガンダ雑誌としては大胆な選定だったと言える。このように、「女声」には宗主国である日本内地の日本作家の作品が掲載されていたが、その作品を見ると、時局に迎合するものというより、かえって反戦・反日的な作品が選ばれていたことがわかる。

以上のように、日本人作家のどの作品を掲載するかの基準は一見、恣意的に見えるが、戦争協力を避けるために、プロパガンダ色の薄いものが選ばれていたことがわかる。「女声」に掲載された賢治「注文の多い料理店」には植民地支配に対するアイロニーさえ読み取ることができる。「女声」文芸欄に掲載する作品の選定には、閑露が関与した可能性があり、そのため、プロパガンダ雑誌という範疇には収まりきらない反帝国主義的政治性をも有するようになったのではないだろうか。

※ 文献などの年時表記は、日本における時代感覚の把握の上から、便宜

的に元号を用いた。

※ 本稿の執筆の際に、関西学院大学の橋本明氏が宮沢賢治「注文の多い料理店」が掲載されている「女声」第二巻第八期を上海図書館から取り寄せてくださった。この場を借りて二氏に感謝の辞を述べさせていたたく。

【注記】

- 1 大橋毅彦、竹松良明、山崎真紀子ほか編『上海1941-1945 武田泰淳』上海の蜚『注釈』（双分社、平成二〇年六月）
- 2 大橋毅彦注（同注1、七一頁）
- 3 雑誌「女声」の文芸欄に掲載されている日本人作家の作品には次のようなものがある。宮沢賢治「注文の多い料理店」（緑妮（陳緑妮）訳、第二巻第八期）や、豊島与志雄「銀の笛と金の毛皮」（緑妮訳、第三巻第一〜三期）、「うどんと石」（緑妮訳、第三巻第四期）、「太一の靴は世界一」（緑妮訳、第三巻第五期）、「象のワンヤン」（緑妮訳、第三巻第八、九、一一、一二期）があった。そのほかには、武者小路実篤の小説「愛と死」（萩原（陶元徳）訳、第三巻第三〜八期）や、火野葦平の怪奇小説「怪談宋公館」（萩原訳、第二巻第一〇〜二二期）などがある。
- 4 「銀の笛と金の毛皮」（第三巻第一〜三期）、「うどんと石」（第三巻第四期）、「太一の靴は世界一」（第三巻第五期）、「象のワンヤン」（第三巻第八、九、一一、一二期）などがある。
- 5 尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」（『近代文学の傷跡』普通社、昭和三八年二月）二三頁

- 6 瀬戸内寂聴「田村俊子年譜」(『瀬戸内寂聴全集』第二巻、新潮社、平成二年三月) 二七六頁
- 7 この大東亜文学者大会の出席者リストは尾崎(同注5、四九〇―五一頁)を参考にして作成したものである。括弧内は不詳、通訳を含む。
- 8 岸陽子「夜に啼く鳥——大東亜文学者大会と一人の中国女性作家」(『中国語知識人の百年——文学の視座から』早稲田大学出版部、平成一六年三月) 一五五頁
- 9 同注8、一六四―一六九頁
- 10 内山完造『花甲録』(岩波書店、昭和三五年九月) 二六一―二六二頁
- 11 初出は蔣義方「歸來後的幾句閒話」(『中国文学』(第二屆大東亜文学者大會中國(華北)代表言論鱗爪集) 創刊号、平成六年)。本稿においては岸(同注8、一五九頁)から引用している。
- 12 陶亢徳は第二回大会に上海代表の一人として出席した中華日報編集長。大会終了後、日本に大使館顧問として滞在し、早稲田大学高等学院講師安藤彦太郎の個人指導をうけた。昭和一九年に帰国(同注5、一〇頁)。
- 13 柳雨生、第一回および第二回大会に上海代表の一人として出席、広東出身。「西洋文学」「大美晚报」を経て、当時汪兆衛政府宣伝部に所属、新国民運動委員会の秘書をしていた。のちに風雨談社長(同注5、九頁)。
- 14 塗曉華「上海淪陷時期《女声》雜誌の歴史考察」(『現代文学研究叢刊』平成一七年三月)
- 15 山崎真紀子注(同注1、一〇〇頁)
- 16 山崎注(同注1、一四九―一五〇頁)
- 17 同注5、一〇頁
- 18 同注5、二九頁
- 19 同注5、一〇頁
- 20 梅娘(大正九年?)、本名孫嘉瑞、吉林長春人。昭和一三年、神田女子義塾家政学部(はつきりと判明されていない)へと日本留学し、昭和一七年以降は北京に居を定めている。「婦女雜誌」の編集を務めていた。代表作には『小姐集』、『第二代』、『魚』、『蟹』などがある。『魚』は第二回大東亜文学賞「選外佳作賞」を受賞し、『蟹』は第三回大東亜文学賞正賞を受賞した。(同注14、塗)
- 21 渡辺澄子「田村俊子を読み直す」(渡辺澄子編『国文学解釈と観賞』今と云う時代の田村俊子——俊子新論、至文堂、平成一七年七月) 一七頁
- 22 同注14、塗。
- 23 劉建輝「戦時下上海の文壇——雑誌『女声』とその周辺を中心に——」(『日本近代文学会「関西支部会報」第一〇号、平成一八年八月)
- 24 趙夢雲注(同注1、一三頁)
- 25 山崎注(同注1、九九―一〇〇頁)
- 26 同注6、二七五頁
- 27 における「注文の多い料理店」本文引用は『新選 名著復刻全集近代文学館 宮沢賢治著 注文の多い料理店 杜陵出版部版』(日本近代文学館、平成七年三月)によるものである。四六頁
- 28 谷暎子「占領下の検閲と賢治童話」(『宮沢賢治研究』Annua Vol.14) 平成一六年三月)
- 29 深澤忠孝「もう一人の兄」(『草野心平研究序説』教育出版センター、昭和五九年四月) 一〇二頁
- 30 同注29、一〇二頁
- 31 西成彦「冷戦と文学」(『新編 森のゲリラ 宮沢賢治』平凡社、平成一六

年五月) 一三〇〜一三三頁

32 『復刻』六三頁

33 同注31、一三三頁

34 同注31、一〇六頁

35 谷川雁「月夜のでんしんぼしら」『賢治初期童話考』(潮出版社、昭和六

〇年一〇月)

36 同35、一三二〜一三三頁

37 木佐敬久「宮沢賢治とシベリア出兵」は雑誌「天秤宮」の創刊号から第

四号にまで連載されていた。その中の「氷河鼠の毛皮」は「天秤宮」創

刊号(天秤宮社、平成二年一月)のほか、「宮沢賢治研究 Annual Vol.1」(宮

沢賢治学会イーハトーブセンター、平成三年三月)にも再録されている。

本稿における木佐の論文の引用はすべて「宮沢賢治研究 Annual Vol.1」(一

四〇〜一七一頁)によるものである。

38 同注35、一二九〜一三〇頁

39 同注35、七頁

40 「氷河鼠の毛皮」の場合では、黒狐を九百疋獲りにいく「タイチ」が突

如車室には行つて来た二〇人の人たちに危うく殺されそうとなつた時、

若い船員らしい男によつて助けられている。同注37、一五三頁

41 本稿における「氷河鼠の毛皮」は「岩手毎日新聞」に掲載されていた際

の原文によるものである(『新校本 第十二巻 童話V劇・その他 校異篇』

五五頁)。

42 同注41、五五頁

43 同注37、一五三頁

44 同注8、一六七頁

45 武田泰淳「上海の蜚」(『竹田泰淳全集増補版 第十八巻』筑摩書房、昭

和五四年七月)一八四頁

46 同注1、一六八頁

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程満期退学)